「藤里の縄文遺跡展」への協力

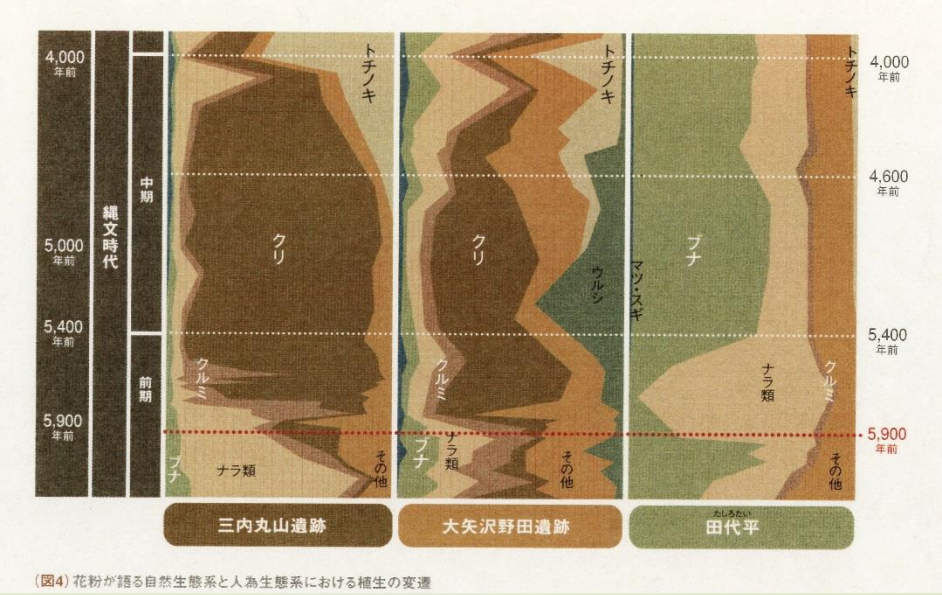
文化遺産観光プロジェクトでは、藤里町教育委員会・白神山地世界遺産センター藤里館が開催している「藤里の縄文遺跡展」に、白神山地と縄文遺跡の関係についての展示パネルを提供いたしました。世界自然遺産に登録されている白神山地には縄文時代から続くブナ林があり、現在世界文化遺産登録を目指している「北海道・北東北の縄文遺跡群」と親和性は非常に高いと言えます。本プロジェクトでは同町との連携を継続し、自然と文化両方にまたがる遺産観光の実践的研究を、同町をモデルに行っていく予定です。

「藤里の縄文遺跡展」の詳細
展示場所：白神山地世界遺産センター藤里館　展示室
展示期間：平成２９年３月１日（水）から３月３１日（金）まで
ウェブサイト：https://www.town.fujisato.akita.jp/c.html?seq=1427

藤里の縄文遺跡展に寄せて

藤里町が位置する北東北の縄文文化は、世界遺産白神山地に代表されるブナ林が育んだ文化だと言えます。ブナ林などの落葉広葉樹林が、一万年以上におよぶ狩猟・採集・漁労の時代である縄文時代を支えてきました。クリやクルミ等の堅果類、山菜・キノコなどの山からもたらされる資源の利用、クマやサケなど動物・魚類との付き合い方は縄文時代から現代までずっと続くものです。

およそ１万年前の世界的な温暖化によって、北東北の自然環境は針葉樹林から落葉広葉樹林（北方ブナ帯）へと変化しました。この結果、生物多様性にすぐれたブナ林が人間の活動領域の近くまで広がり、クリ・クルミをメジャーフードとして利用する環境が育まれました。縄文時代前～中期の大集落である三内丸山遺跡（青森市）では、食べ物だけでなく建築部材にもクリが多く利用されたことが分かっています。同じ時代にウルシも盛んに利用され、現代にもつながる漆器の製作も始まりました。これらの有用植物は、人の手によって管理・栽培されていたと考えられています。一方、当時の花粉の分析から、同じ落葉広葉樹林であるブナ林が集落周辺から山地まで広がっていたことが分かっています。このような「里山」とも呼べる環境が、北東北における縄文時代の景観に他なりません。



（図4）花粉が語る自然生態系と人為生態系における植生の変遷

三内丸山遺跡周辺における植生変遷
（『青森県史別編　三内丸山遺跡』より抜粋）

藤里町の縄文時代の遺跡は前期から見られます。町内には昨年遺跡登録された室岱遺跡（縄文後期）、一ノ渡遺跡（縄文晩期）など後半期の遺跡が目立つようです。これらの時期には気候が冷涼化し、遺跡数や規模が縮小していく傾向が見られます。しかし北東北には、大湯環状列石（鹿角市）や伊勢堂岱遺跡（北秋田市）のようなストーン・サークルが作られ、また土偶や漆製品で知られる亀ヶ岡文化が現れるなど、列島内でもっとも栄えた文化圏が広がりました。今回展示されている石棒・石剣は、これらの時代に作られた儀礼の道具であり、当時の精神文化を伝える貴重な文化遺産なのです。

大湯環状列石・伊勢堂岱遺跡を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、現在世界文化遺産登録を目指しています。藤里町の背後に広がる白神山地とともに、落葉広葉樹林に育まれた縄文文化的な景観が、将来の世代にも受け継がれて行くことを願っています。

国際教養大学アジア地域研究連携機構

助教　根岸　洋

根岸　洋

1979年秋田県横手市生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科修了（博士（文学））。青森県教育庁文化財保護課勤務後、2014年9月より現職。